

十九世紀末 のフランス、ベルギー、イタリアの労働運動内にあった改良主義的・日和見主義的な一流派である。マルクス主義に反対して社会主義は労働者階級ばかりではなく、なやめる全人類に立脚すべきである、と主張した。したがって、科学的社会主義の「狭さ」に反対し、階級闘争に反対し、階級間の平和とブルジョアジーの「りっぱな分子」との協力を説いた。彼らはブルジョアジーにむかって、論理と公正の原理にしたがって行動するよう、そして彼らの個人的利益にしたがって行動しないように呼びかけた。彼らは、経済的要因が決定的要因であることを否認し、すべての社会的要因のアンテグラリテ（全体）を強調したが、このことは道徳的要因を優位におくことを意味した。